

マーシャル『産業経済学』について：生産的 vs. 非生産的

関西外国語大学英語キャリア学部教授
滝川好夫

- 1 はじめに
- 2 富：物的富 vs. 非物的富（人間的富）
- 3 富の「生産的 vs. 非生産的」、労働の「生産的 vs. 非生産的」
- 4 労働者の資質：特化された資質 vs. 特化されていない資質
- 5 「人口と労働」の「量 vs. 質」
- 6 労働者に対する教育：家庭教育、学校教育、社内教育
- 7 労働の質と救貧対策：院内救済 vs. 院外救済
- 8 産業の組織化の歴史
- 9 「産業の局地化の利益」：産業の集積化
- 10 分業の「メリット vs. デメリット」
- 11 おわりに

1 はじめに

マーシャル『産業経済学』はアルフレッド・マーシャルとメアリー・マーシャルの夫婦共著となっているが、内実はアルフレッド・マーシャルによる単著である。同書は、英国ケンブリッジ大学で学位をとる際に経済学を試験科目として選択するモラル・サイエンスや歴史学の専攻生にとっての指定図書であり、橋本昭一氏はマーシャル『産業経済学』を「静態的価格理論の領域での体系は、正常価値と市場価値といった用語の意味の変化等を除けば、1879年（同書一引用者注）でほぼ完成していたといっても過言ではない」（訳書 p.302）と評価している。

本稿では、マーシャル『産業経済学』に基づいて、第2節では、マーシャルの富（物的富と非物的富）の定義を取り上げている。第3節では、富の「生産的 vs. 非生産的」、労働の「生産的 vs. 非生産的」を検討している。第4節では、労働者の資質（「特化された資質 vs. 特化されていない資質」「画一的である労働 vs. 画一的でない労働」）を取り上げている。第5節では、「人口と労働」の「量 vs. 質」を検討している。第6節では、労働者に対する教育（家庭教育、学校教育、社内教育）を検討している。第7節では、労働の質と救貧対策（院内救済 vs. 院外救済）を検討している。第8節では、産業の組織化の歴史を取り上げている。第9節では、「産業の局地化の利益」を検討している。第10節では、分業の「メリット vs. デメリット」を検討している。

2 富：物的富 vs. 非物的富（人間的富）

マーシャル『産業経済学』は、経済学の主題の1つは「富」であると論じ、富を「物的富」と「人間的あるいは非物的富」に分類している。「物的富」は「誰かに帰属させうる、それゆえに交換されうる、楽しみの物的源」（訳書 p.7）、「人間的あるいは非物的富」は「直接的に生産に携わる人間の作業能率を高め、したがってかれらの物的富の生産力を高める人間のエネルギー、能力、肉体的、精神的、道徳的慣習」（訳書 p.7）である。

物的富は、所有され、交換されるものであり、「楽しみの物的源」である。人間的あるいは非物的富は、物的富（楽しみの物的源）を生産する「人間のエネルギー、能力、肉体的、精神的、道徳的慣習」である。

3 富の「生産的 vs. 非生産的」、労働の「生産的 vs. 非生産的」

(1) 富の「生産的 vs. 非生産的」

マーシャルは「生産的」という言葉は富の生産性を意味するものであると指摘し、一国の富は、自然力と人力の共働によって生産されると論じている。富を生産する際、人間は自然が供する事物（鉄、石、木などの物質、風力、太陽熱のような他のあらゆる力の源となるような自然力）に働きかけるが、マーシャル『産業経済学』は「人手がなしうるのは、せいぜい事物を動かすことである。（中略）言葉の厳密な意味におい

て、かれはつくったり、創造したりすることはなく、ただ配合する。」(訳書 p.10) と述べ、「生産は創造を意味せず、ただ再編成だけを意味するがゆえに、ある人々が考えていたように、財の運送・販売にかかわる者たちの仕事は生産的ではありえないと想定することは誤りである。」(訳書 p.10) と述べている。現代マクロ経済学では、生産・運送・販売はすべて付加価値の創造をしているものとみなされているが、マーシャルの意図は逆に生産・運送・販売のすべてが創造を行っていないなくても、それぞれは「自然によって与えられたものを、人間にとってより有利なものに変えることに貢献している」(訳書 p.11) という意味で「生産的」であることを強調している¹。

すなわち、第1に、一国の富は自然力と人力の共働によって生産される。第2に、自然力と人力の共働による富の生産は創造を意味せず、ただ再編成だけを意味する。第3に、生産・運送・販売はすべて「生産的」である。第4に、人力は自然力の様相を変え、また、自然力は人力の質を変える。

(2) 労働の「生産的 vs. 非生産的」

富は「物的富」と「人間的あるいは非物的富」から成り、マーシャル『産業経済学』は「生産的労働は、通常、非生産的なものから、明瞭に引かれた線によって、区分されうるものではない。聖職者は往々にして非生産的労働者として分類されるが、もしも道徳的影響を及ぼすことにより、労働者をより謹厳、正直、勤勉にするなら、かれはそのかぎりで人的富について生産的である。またある種のレクリエーションは、労働者が最高の能率を発揮するためには必要であるゆえに、音楽家が間接的に一国の富を増進させ、間接的に生産的であることは充分ありうることである。」(訳書 p.8) と述べている。すなわち、「生産的労働」は直接的に物的富を生産し、「非生産的労働」は実は「人間的あるいは非物的富」を生産することがあり、そのことにより間接的に「物的富」を生産しているので、「生産的労働」と「非生産的労働」は明瞭に引かれた線によって区分されえない²。

4 労働者の資質：特化された資質 vs. 特化されていない資質

マーシャルは、労働者の肉体的、知的、精神的、道徳的な資質は、1つは生まれつき、もう1つは若い時代の家庭環境によって決まると論じている。マーシャル『産業経済学』は、熟練労働者に要求される能力(人的資本)について、特化されたものを「特化資本」、特化されていないものを「非一特化資本」とそれぞれ呼び、「発明の進

¹ 人力は自然力の様相を変え、また、自然力は人力の質を変える。天候は自然が与える賜物のうちもっとも重要なものの一つであり、極暑・極寒は人間を消耗させ、生産における人間労働の効率性を低下させる。

² マーシャル『産業経済学』は、物的富を生産するのに、労働生産性を「人間的あるいは非物的富」は高めるが、「福利」(「持つことが有利である、あらゆる人間の能力や資性、さらにはその他のあらゆる享樂の源泉」：訳書 p.8) は高めないと論じている。

展が、単なる手を使う技能、若年から訓練して修得する手先の技能の重要性を減じせしめつつある。そしてそれゆえに、すべてとはいえないにしても多くの業種においては、労働者の特化された資質の重要性が、特化されていないものに比して、減じている。」(訳書 p.142) と述べている。

(1) 特化された資質 vs. 特化されていない資質

マーシャル『産業経済学』は、「特化されておらず、多くの業務に利用しうる産業的資質と、一つの業務に特化されている資質とを比較するならば、後者に比して、前者の重要性が高まっていることに気付くだろう。」(訳書 p.137) と述べ、「特化された資質」と「特化されていない資質」を区別し、「特化されていない資質」がより重要であると論じている。マーシャルは「特化されていない資質」を「新しくかつ困難な問題に、正しく、素早く対処してゆくことができる資質」(訳書 p.138) と説明し、「特化されていない資質」を修得している優れた労働者は、容易に他の業種へ移ってゆくことができると論じている。

(2) 「画一的である労働 vs. 画一的でない労働」: 定型型 vs. 非定型型

マーシャル『産業経済学』の「画一的である労働 vs. 画一的でない労働」は今日の「定型型労働 vs. 非定型型労働」にあたるであろう。マーシャルは、「機械の増大という大勢が、肉体的強靱さないしは一組の運動を間断なく行使することにより得られる技能だけを必要とする肉体労働にとってかわりつつある。機械は画一的な運動を、人間ができるよりも、より正確に、より能率的に行なうことができる。(中略) 機械は判断力を要する手仕事にまでは、それほど、深く蚕食してゆかないし、一方機械の管理には通常判断力が必要であるので、今日では以前にまして知性と精神的資質にたいするはるかに大きな需要が存在する。」(訳書 p.138) と述べている。マーシャルの時代では機械、現在ではA Iであるが、機械をA Iと読み替えると、上記引用文は、「A Iは定型型労働にとってかわりつつある。A Iは定型型労働を人間ができるよりも、より正確に、より能率的に行なうことができる。しかし、A Iは判断力を要する非定型型労働にまでは、それほど、深く蚕食してゆかないし、A Iの管理には通常判断力が必要であるので、以前にまして知性と精神的資質にたいするはるかに大きな需要が存在する。」と解釈しうる。

すなわち、第1に、労働者の資質(肉体的、知的、精神的、道徳的な資質)は、1つは生まれつき、もう1つは若い時代の家庭環境によって決まる。第2に、発明の進展は特化された資質の重要性を減じ、特化されていない資質(「新しくかつ困難な問題に、正しく、素早く対処してゆくことができる資質」)を増す。第3に、機械をA Iと読み替えると、A Iは定型型労働にとって代わりつつある。A Iは定型型労働を人間ができるより

も、より正確に、より能率的に行なうことができる。A I の管理には通常判断力が必要であるので、以前にまして知性と精神的資質にたいするはるかに大きな需要が存在する。

5 「人口と労働」の「量 vs. 質」

(1) 人口の「量 vs. 質」

マーシャル『産業経済学』は「子供のための健全な肉体的、知性的、道徳的教育」（訳書 p.35）を行うことができる所得水準を「安楽基準」と呼び、人口の量について言えば、第1に、所得水準の上昇は結婚・出生数を増加させ、人口数を増大させる。第2に、好況期は結婚・出生数を増加させ、人口数を増大させる。第3に、所得水準の上昇は安楽基準を高め、安楽基準の上昇は無事に育つ子供の割合を高めるので、人口数を増大させる。人口の質について言えば、第1に、所得水準の上昇は安楽基準を高めるので、人口の質を高める。第2に、安楽基準の上昇は子供の養育・扶養手段の改善を伴うので、人口の質を高める、と論じている。

人口の問題について、質の考慮をすることなく、量の増大を促進することは正しいか否かは検討問題の1つであるかもしれないが、所得水準の上昇は、一方で人間の自然的性向から人口の量を増やし、他方で安楽基準を高めるので人口の質を高める³。

すなわち、第1に、所得水準の上昇は人口の量と質を増大させる。第2に、安楽基準（子供のための健全な肉体的、知性的、道徳的教育を行うことができる所得水準）の上昇は人口の量と質を増大させる。

(2) 労働の「量 vs. 質」

マーシャル『産業経済学』は「労働は資本による扶養と資本からの補助を必要としている。」（訳書 p.20）と述べて「労働を扶養する資本（報酬資本ないし賃金資本）」と「労働を補助する資本（補助資本）」を区別し、労働の量について、「ある地域での労働需要は長期的にはその地域への資本供給の増加をもたらすなんらかの企て以外によつては、増やすことができない。」（訳書 p.21）と述べている。

マーシャル『産業経済学』は「人間は自分の労働生産物のすべてから当面の享楽を求めることを控え、その一部を将来の労働に役立つ物をつくるために利用する。これらの生産に必要なものを資本とよぶ。」（訳書 p.15）と述べ、財フローと資本ストックを区別していないが、「労働を扶養する資本」の具体例として住居ストックなどを挙げ、「労働を補助する資本」の具体例として道具、機械、工場、その他産業目的のために使用される建物、鉄道、運河、道路、船舶ストックなどを挙げている。

マーシャルは、企業が「労働を扶養する資本」を増やすと労働者は喜ぶが、それは一

³ 所得水準の増大は安楽基準の上昇を伴うので、「安楽基準>所得水準」は解消しにくい。

時的喜びになるかもしれない、逆に、「労働を補助する資本」を増やすと労働者は悲しむが、それはやがて大きな富を生み、労働者を喜ばせるかもしれないと論じている⁴。

マーシャルは、労働の質について、一国の労働の平均的能率は個々の労働者の肉体的、知性的、精神的および道徳的性質に依存していると論じている。

すなわち、第1に、労働の量を増やすには「労働を扶養する資本（報酬資本ないし賃金資本）」と「労働を補助する資本（補助資本）」が必要である。第2に、労働の質は労働者の肉体的、知性的、精神的および道徳的性質に依存している。

6 労働者に対する教育：家庭教育、学校教育、社内教育

マーシャル『産業経済学』は「労働によって労働者の性格がきまり、労働者によって、労働の質がきまってくる。」(p.2)と述べ、生産における人間労働の効率性は「肉体的強健さと活力」「知識と精神的能力」「道徳的資質」の3つに依存していると論じている。

マーシャル『産業経済学』は「人間を熟練労働に適応させる費用はその人の両親によって支弁される。そしてその費用は主に賃金からまかなわれる。(中略)この費用は(中略)資本支出である。したがって賃金は人的資本蓄積の主たる源泉であると言えよう。」(訳書 p.49)と述べ、労働者の体力、知力、精神力、道徳力を高めるための教育費用を資本支出(投資支出)とみなしている。

すなわち、第1に、労働の質によって労働者の質が決まり、労働者の質によって、労働の質が決まる。労働の質と労働者の質は相互に影響し合っている。第2に、労働者の質を労働生産性と解釈すれば、労働生産性は体力、知力、精神力、道徳力の4つに依存している。第3に、教育費用は資本支出(投資支出)である。

(1) 「家庭教育 vs. 学校教育」と「学校教育 vs. 社内教育」

マーシャル『産業経済学』は、「肉体的強健さと活力」は物的富を増大させ、逆に物的富は「肉体的強健さと活力」を高めると論じている。「知識と精神的能力」については、労働者階級への教育を「教養教育 vs. 技術教育」に分類し、教養教育の目的は「人間が、通常的人生上の問題について知的な意見を持つことを、そしてまた新しい緊急問題に遭遇するさいの臨機の才を養うこと」(訳書 p.14)、技術教育の目的は「人間が携わる特殊業務の手順や機械を理解させること」(訳書 p.14)であると述べ、「技術教育は学校で教えるべきであるが、多くの職業分野で要求される教育の大部分は、職場でのみ修得できるものである。」(訳書 p.14)と論じている。「道徳的資質」については、「一国民の性格はその国民の母たちのそれ、すなわち母たちの意志、礼節、誠実

⁴ マーシャル『産業経済学』は、財フローと流動資本ストックを区別せず、「それが使用される生産において、一度の使用によってその役割のすべてを果たす資本」(訳書 p.24)を「流動資本」、「なんらかの耐久性を備え、その耐久期間にわたって収益をもたらす資本」(訳書 p.24)を「固定資本」とそれぞれ呼んでいる。

に主として依存する。労働者が正直、信頼性、潔癖、細心、活動性、誠実、敬意、自尊心を身につけねばならないのは、子供時代しかも家庭においてである。」(訳書 pp.14-15) と述べ、道徳的資質は家庭教育において培われると論じている。

すなわち、第1に、「肉体的強健さと活力」と物的富は相互に影響し合っている。第2に、労働者階級への教育は「教養教育 vs. 技術教育」に分類され、教養教育は学校で、技術教育は主として職場で行われる。第3に、道徳的資質は家庭教育において培われる。

(2) 社内教育：徒弟制

マーシャルの時代の「徒弟制」は現在の社内教育制度に読み替えられる。徒弟制度について、マーシャル『産業経済学』は「この制度は、資本家たちが、かなりの貧しい階層の息子たちの教育のために、なにがしかの資本を投資して、確実に利潤を得さしめるものである。あるばあいには、雇用者は、若者に、かれが業務を習っている間の数年間、かなりの賃金を支払う。しかしかれの徒弟期間の最後の2・3年の間は、その若者の仕事は、かれが徒弟条件によってその額で働くことが拘束されている賃金以上の価値がある。」(訳書 pp.138-139) と述べている。

マーシャルは「徒弟制」の問題点として、第1に若者は長期間一人の親方に拘束されるのを嫌がるようになったこと、第2に親方が徒弟に適切な指導を行うことを、怠ることがしばしばあるという不平があったことを、挙げている。

現在の社内教育制度は、一方で企業は新入社員に企業が必要としている技術水準を修得させることができない、他方で労働者は他企業で異なった技術を修得したい、ことから機能しにくくなっている。

7 労働の質と救貧対策：院内救済 vs. 院外救済

マーシャル『産業経済学』は、「イギリスの救貧法は人口増加を量の点では上向きに、質の面では下向きにうながすかたちで作用していた。」(訳書 p.37) と述べている。マーシャルは、「救済に価する貧民」と「救済に価しない貧民」を区別しなければならないと論じている。

(1) 救貧対策：院内救済

マーシャル『産業経済学』は、「院内救済は不人気である。それは刑務所に入れることに似ており」(訳書 p.40) と述べている。

(2) 救貧対策：院外救済

マーシャル『産業経済学』は、産業の「一時的危機 vs. 永続的危機」と雇用につい

で、「仕事がなくなるという事態が一時的なものであれば、困っている人々に仕事を与えて救うことはいいことであろう。なぜならこの救済法は自尊心を傷つけないからである。しかしながら、ある業種の危機が、単に一時的なものでないのなら、その業種から去らないように説得することは、本当の親切とはいえない。」(訳書 pp.21-22)と述べている。マーシャルは、院外救済の弊害として、第1に賃金の援助として院外救済を受け取ってれば、賃金が不当に低く抑えられる、第2に院外救済は往々にして、怠け者、浪費家、ずるい人間、偽善者の戦利品となることを挙げている⁵。

8 産業の組織化の歴史

マーシャル『産業経済学』は、産業の能率は組織に依存していると論じ、産業の組織化の歴史を以下のようにまとめている。

原始生活時代には、未開部族は、第1に、全員が同じ仕事(例えば、兵士、狩人、漁師、道具製作者、建築家など)をし、防衛のためを除くとほとんど他人と離れて生活した。第2に、特殊な仕事(例えば弓作りなど)について特別の適応をできる者が出てきたので、社会をひとつの生活共同体とするような分業が徐々に芽生えた。第3に、嫌な仕事は女性や奴隷によって行われるようになった。

牧畜・遊牧の時代には、動物が家畜化され、富の不平等が始まる。

農業の時代には、耕作地の所有が社会建設の堅固な土台となった。時としてすべての土地が主権者によって所有されたが、より一般的には村の土地は村全体によって共有された。村落共同体は定住生活を営み、村全体で自給自足していた。各仕事は家庭内で世襲され、職業選択の自由をほとんどもっていなかった。

「農村 vs. 都市」の時代には、都市の住民が無知であったときの唯一の行動方針は隣人を略奪することであったが、都市の成長によって知識が増大してくると、住民は他人を略奪することを考えないようになり、また略奪されることを極めて嫌悪するようになった。都市住民は圧迫から自らを防御し、文明化の手法を学んだ。農村は戦争や封建領主の強盗行為で蹂躪され、また村民たちは通常農奴であった⁶。

⁵ マーシャルは、以下のオクタヴィア・ヒルの被救済貧民発生防止方法を紹介している。

- (1) 家賃の支払等の義務はすべて履行させるようにする。
- (2) 金品を与えるよりも仕事を与える方がはるかに良い。
- (3) 共感によって力づけ、時がたてば実を結ぶであろう熱意を励ます。
- (4) 各人はそれぞれ独自の人生観をもっており、また各人はその人生についてはより良く判断でき、したがって、その人にじっくり考えるように、また正しく判断する心構えを与えることである。その人について考えたり、判断したりすることではない。
- (5) 高貴な喜びの源泉を切り拓くことのできるあらゆる力を磨く必要がある。

⁶ 奴隷制について、マーシャル『産業経済学』は「歴史の示すところでは、奴隷制に基づいたあらゆる文明は、たとえ早熟の成長を示してきたとしても、芯がくさり、急速に衰退してゆく。というのはある民族(古代のギリシャ、ローマ引用者注)が何世代かを、文明生活の興奮のもとに生きのびたとしても、労働をさげすみ、労働する者を軽蔑している間に、その民族は冷酷で浮薄に、したがってまた軟弱になっていたからである。」(訳書 p.56)と述べている。

都市は急速に発展し、種々の形態の専門的職業が現れるにつれて分業が生じ、都市産業は高度に組織化されるようになった。全市民は共通の福祉を獲得すべく公共心と冒険心をもって協働した。

都市がその自由を完全に成就し繁栄しはじめると、旧い家柄の指導的商人が独自の特権（都市ギルドの特権）を主張した。都市ギルドはクラフト・ギルド（手工業者の結社）から攻撃を受けて打ち倒され、クラフト・ギルドが都市の主導権を握った。時間が経過するにつれて、クラフト・ギルドの仕事を遂行していくやり方に関する諸規則は拘束的なものになってゆき、各人が好む業務に資本や労働を投入してゆくことを妨げるようになった。クラフト・ギルドの力は減退しはじめ、ついにはその影響力をまったく失った。

営業の自由がふたたび増加し、銀行業が成長していった。資本を、それほど欲求されていないところから、大いに欲求されているところへ移す難しい技術において得られた経験は大いに役立った。

絶えざる専門化ないし分業の成長が見られ、もっともはっきりした分業は農業労働と製造業労働であった。農業者は各地に散在したが、製造業者は人口稠密な地域に集中した。さらに一層の分業や専門化がすすみ、それぞれの業種は別々の立地を求めた（産業の局地化）。

自由競争の時代になり、労働者（被雇用者）は相互にもっとも有利な雇用先を争い、企業（雇用者）はもっとも安くかつもっとも効率的な労働を争っている。また、企業は新しい機械の発明や新しい製造法を争っている。あらゆる方面での競争に誘因と可能性が与えられている。

労働者の知性の成長と、国の一地方から他地方へ移動する可能性の増大とは、情報交換の密度を高め、またある程度まで種々の産業中心地間の労働の自由な循環をもたらした。資本は日々循環の自由を得てゆき、したがって資本を動かす技能もまた自由に循環する。利潤は各業種、国内の各地域で均等化してゆく⁷。

9 「産業の局地化の利益」：経済特区（産業の集積化）

マーシャルは「小工場は、その数がどうであれ、もしもその多くが同一地域に終結するのでなければ、大きなものに比して相対的に極めて不利であろう。」と述べ、小工場を同一地域に集めることを提案し、このような産業の集積化（「産業の局地化」「技能の経済」）について、以下の3つのメリットを挙げている。

⁷ ただし、利潤に関して、マーシャル『産業経済学』は「というのは利潤は例外的に困難であったり人に喜ばれない業種において、例外的に高いからである。資本の自由な循環は、このような原因によって生じる不均等を取り除くことはできない。」（訳書 p.61）と述べている。

① 技能・技術の向上

マーシャルは「人々の多くが同じ業種で働いていれば、人々は互いに教育しあう。その仕事に要求される技能と洗練さが空気のように広まり、子供たちは成長につれて、それを吸いとってゆく。」(訳書 p.66) と述べている。産業の集積化は、技能教育・技術知識の拡張を促進する。

② 新しい発明の広がり

マーシャルは「一人一人は隣人たちの発想から利益を得る。人は、新しい試みに、自分と同じように関心をもっている者と交換することにより刺激をうける。そして新しい発明はそれぞれ、それが新しい機械であれ、新しい工程であれ、事業組織の新しい方法であれ、いったん始められると、広まってゆき、改善が加えられるものである。」(訳書 p.66) と述べ、産業の集積化は新しい発明を広げ、改善が加えられる。

③ 企業の枠を超えた転職

マーシャルは「ひとつの産業が局地化されている地域においては、熟練工は自分にあった職をみつけやすくなる。雇主は職長の空席を簡単に埋めることができる。」(訳書 p.66) と述べ、企業の枠を超えた転職が行われやすい。

10 分業の「メリット vs. デメリット」

マーシャル『産業経済学』は「分業の利益は、その商品にたいする需要が極めて多く、したがって大量に生産される場合にみられる」(訳書 p.65)「分業は人間の自然にたいする支配力を増し、富の増加を通じて社会進歩を促進する。」(訳書 p.70) と述べている。分業の「メリット vs. デメリット」は次の通りである。

(1) 分業のメリット

分業のメリットは、一人の人間がつねに自らに合った最高度の仕事に従事しつづけることによって得られる「技能の経済」「精神的・肉体的卓越の経済」「発明の経済」(訳書 p.63) である⁸。

(2) 分業のデメリット

分業のデメリットは、第1に「ただひとつの業種にのみ利用できる技能をもってい

⁸ マーシャルは、労働者の多くが同じ業種で働いていれば、人々は互いに技能・技術知識を教育しあい、一人一人は隣人たちの発想から利益を得ると論じ、これを「産業の局地化」と呼んでいる。

⁹ マーシャル『産業経済学』は、雇用者(経営者)について、「雇主の時間は仕事をするために利用されるのではなく、いかなる仕事が、いかにしてなされ、また誰がそれを担当すべきかを決定するために用いられるべきである。」(訳書 p.63) と述べている。

る者は、その業種が不況になったり、あるいは、その技能が機械に代替されると、大きな被害を受けざるを得なくなる。」(訳書 p.70)、第2に「絶えざる肉体の緊張ないし悪環境での長時間作業をとまなう労働の場合、この単調さは極めて大きな弊害である。」(訳書 p.70)である。

1.1 おわりに

本稿では、マーシャル『産業経済学』に基づいて、次のことを明らかにした。

- (1) 富は「物的富」と「人間的あるいは非物的富」に分類される。物的富は「楽しみ」の物的源であり、人間的あるいは非物的富は、物的富を生産する人間のエネルギー、能力、肉体的、精神的、道徳的慣習である。
- (2) 一国の物的富は自然力と人力の共働によって生産され、人力は自然力の様相を変え、また、自然力は人力の質を変える。
- (3) 「生産的労働」は直接的に物的富を生産し、「非生産的労働」は実は「人間的あるいは非物的富」を生産することがあり、そのことにより間接的に「物的富」を生産している。
- (4) 労働者の資質(肉体的、知的、精神的、道徳的な資質)は、1つは生まれつき、もう1つは若い時代の家庭環境によって決まる。発明の進展は特化された資質の重要性を減じ、特化されていない資質(「新しくかつ困難な問題に、正しく、素早く対処してゆくことができる資質」)を増す。マーシャルの機械をAIと読み替えると、AIは定型労働にとって代わりつつある。AIは定型労働を人間ができるよりも、より正確に、より能率的に行なうことができる。AIの管理には通常判断力が必要であるので、以前にまして知性と精神的資質に対するはるかに大きな需要が存在する。
- (5) 所得水準の上昇は人口の量と質を増大させる。安楽基準(子供のための健全な肉体的、知性的、道徳的教育を行うことができる所得水準)の上昇は人口の量と質を増大させる。
- (6) 労働の量を増やすには「労働を扶養する資本(報酬資本ないし賃金資本)」と「労働を補助する資本(補助資本)」が必要である。労働の質は労働者の肉体的、知性的、精神的および道徳的性質に依存している。
- (7) 労働の質によって労働者の質が決まり、労働者の質によって、労働の質が決まる。労働の質と労働者の質は相互に影響し合っている。労働者の質を労働生産性と解釈すれば、労働生産性は体力、知力、精神力、道徳力の4つに依存している。
- (8) 「肉体的強健さと活力」と物的富は相互に影響し合っている。労働者階級への教育は「教養教育 vs. 技術教育」に分類され、教養教育は学校で、技術教育は主として職場で行われる。道徳的資質は家庭教育において培われる。

(9) 救貧対策は、人口を量の点では上向きに、質の面では下向きに促す。

【参考文献】

Marshall,A. and M.P.Marshall, The Economics of Industry, London : Macmillan and Co. Second Edition,1881 (橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部、1985年3月)。

滝川好夫『アベノミクスと道徳経済』神戸大学経済経営研究所研究叢書 75、2015年3月。